

# ロシア語母語話者の発音の特徴と指導における問題点

—日本人日本語教師に対する調査から—

渡辺裕美

〔キーワード〕 音声教育、ロシア語圏、ロシア語母語話者、発音の特徴、指導法

## 〔要 旨〕

ロシア語圏では音声指導に関する要望が強いにもかかわらず、ロシア語母語話者の音声教育に焦点をあてた研究は極めて少ない。そこで、日本人日本語教師13名を対象にロシア語母語話者の発音の特徴とロシア語圏の発音指導の現状及び指導における問題点について調査した。その結果、①ロシア語母語話者の発音にはこれまでにあまり指摘されていなかった「す」が「ず」になる、拗音が直音になる、助詞が強く発音されるなどの特徴が見られることが明らかとなった。また、②ロシア語圏において発音指導は教師の裁量に任されており、教師は指導にあたって学生の発音の特徴に関する認識の不足や、指導面、学生の意識、時間不足などに問題を感じていることが明らかとなった。

本稿では、以上のような発音の特徴と指導における問題点をふまえロシア語圏の音声教育の現状と課題を述べた。

## 1. 研究の目的

### 1.1 背景

ロシアの日本語学習者は約1万1千人を数え、増加の一途をたどっている。増加率は2003年からの3年間で15.6%に上り、これと軌を一にして近隣のNIS諸国であるウクライナ、ベラルーシ、アゼルバイジャンでも日本語学習者は急増している（国際交流基金2010）。

ロシアにおける日本研究及び日本語研究の歴史は古く、日本語教育についてもその独自の教育方法や言語学習観について今村（1994）や木谷（1998）で報告されてきた。さらに、仲矢・稲垣（2005）は、ロシアの言語教育の特徴の一つである「文法対訳法と徹底した暗記練習と翻訳練習を中心とする教授法」について詳細に報告し、この教授法が現地教師の文法や翻訳、読解指導の自信を支える重要な要素であると指摘している。

仲矢・稲垣（2005）は、ロシア・NIS諸国の日本語教育支援のあり方を再考するためにロシア、ベラルーシ、アゼルバイジャン、カザフスタンの4カ国40名の日本語教師（現地教師36名、日本人教師4名）を対象に、不得意分野を詳細に尋ねる調査も実施している。その結果、第一位「アクセント・イントネーション」12名、第二位「表記（漢字）」10名、第三位「音声」7名というように、「アクセント・イントネーション」及び「音声」が「会話」「通訳」「作文」

などを上回り、第一位と第三位になった。また、現在感じている困難点と要望を尋ねた質問では、第一位「素材」29名、第二位「設備・備品」21名、第三位「音声指導」20名と、「音声指導」が「シラバス」「表記・漢字指導」「会話指導」などを上回り、第三位になった。これらの結果をもとに、仲矢・稲垣 (2005) は、ロシア・NIS 諸国では音声指導の要望が強いと述べている。

また、筆者はロシア語を主要な母語とする NIS 諸国ベラルーシ<sup>(1)</sup>に赴任していたが、その際、学生の要望から音声教育の必要性を実感した。しかしながら、ロシア語母語話者である日本語教師からは「音声教育を受けたことがないからどう指導していいかわからない」「何を指導すればいいかわからない」などの声が聞かれ、教師が把握している学習者の発音の特徴も個別の事例にとどまっているなど、体系だった音声教育がなされていないのが現状であった。

## 1.2 先行研究

ロシア語圏での音声指導に関する要望は強いにもかかわらず、ロシア語母語話者の音声教育に焦点をあてた研究は極めて少ない。それらは、ロシア語母語話者の一部の特徴を取り上げているに過ぎず、そこから全体的な特徴を捉えるのは困難である。

ロシア語母語話者の発音の特徴について、多数の項目にわたり指摘している調査に、助川 (1993) がある。この調査は、12の言語を母語とする日本語学習者の発音の特徴に関して、どのような特徴が見られるかを、各言語の専門家や日本語教師に質問紙で調査した結果をまとめたものである。分節音と韻律について想定される170項目の質問項目を設けて網羅的に調査を行っている点に特徴がある。

しかしながら、この調査はもともとロシア語母語話者のみに焦点を絞った調査でないため、回答者がロシア語研究者1名と限られており、評定者内や評定者間の評定の「ゆれ」(松崎 1999: 32) からくる特徴の見落としの可能性が排除できない。例えば、ロシア語母語話者の発音の特徴について、鮎澤 (1991) や船津 (2005) は疑問文を含む「全ての文末でピッチが下降」する点を一致して指摘しているが、このロシア語研究者は「疑問文を下降調で発音する」に対して「0 (見られない)」をつけている。したがって、より多くの専門家の意見を収集し、見落としを少なくする必要があると考えられる。

松崎・河野 (2005b) は、ロシア語母語話者1名の発話の特徴を記述している。これには、助川 (1993) にはない特徴も挙げており参考にはなるが、特定の個人の誤用分析の結果であるため、それがロシア語母語話者全般について言えることかどうかが不明である。

戸田 (2006a) は、多国籍の学習者に「自分の発音の問題点を詳しく書いてください」と自由記述させる調査を行い、ロシア語母語話者26名の結果をまとめている。これは、学習者が自己認識している問題点を知ることが主要目的としており、発音の問題点を網羅的に把握するこ

とを意図したものではない。これに関して、鮎澤 (2005: 36) は、「学習者自身の「母語の耳」では自分の日本語発話における問題点には気づきにくい」ことを指摘している。実際、各学生が記述しているのは2、3項目で、記述内容もアクセントとイントネーションに集中し、その他はラ行、長音などわずかな項目が挙げられているのみである。助川 (1993) が挙げた「[h] が [x] となる」「[う] が円唇化の著しい [u] になる」などの特徴もここにはなく、学習者の主観的報告には限界があると考えられる。

そこで本調査では、助川 (1993) の質問紙を用い、ロシア語圏で日本語教育に携わる複数の日本人を対象に調査を実施する。本調査の目的は、第一にロシア語母語話者の日本語の発音の特徴をより網羅的に明らかにすること、第二にロシア語圏の発音指導の現状と指導における問題点を明らかにすることである。

## 2. 調査の方法

### 2.1 調査対象者

ロシア語圏であるロシア及びベラルーシで日本語教育に携わっている日本人日本語教師に回答を依頼した。特に、一人の教師の判断だけでは評定の「ゆれ」による特徴の見落としの可能性があることから複数の日本人日本語教師に回答を依頼し、13名の協力を得た。13名は、モスクワ、サンクトペテルブルクなどロシア及びベラルーシの9地域の高等教育機関または日本語教育機関で日本語教育に携わっている教師で、ロシア語母語話者への指導期間は2ヶ月～12年（1年未満3名、1年以上2年未満7名、2年以上3年未満1名、4年以上2名）であった。

### 2.2 質問紙調査

回答はメールを通じて行った。まず、ロシア語母語話者の日本語の発音の特徴について回答してもらい、次にロシア語母語話者に対する発音指導の現状に関して、自由記述を求めた。

発音特徴項目の選別及び追加は、ロシア語母語話者である日本語教師2名と筆者の3名で行った。助川 (1993) で用いられた分節音と韻律についての特徴170項目の中から「[b/→[β]]」「ざ→ジャ」「アイ→エー」などロシア語母語話者には明らかに見られない特徴95項目を除き、170項目にはないが出現すると判断した「お→ア」「エ段の子音の後ろにィェが入る」など特徴8項目を追加した。その結果、調査項目は83項目となった。具体的な発音特徴項目は資料1「ロシア語母語話者の発音特徴調査票」の項目一覧に示す。たとえば「27. ラ行はじき音→ふるえ音の [r]」は、「日本語のラ行はじき音をふるえ音の [r] で発音する特徴がある」という意味である。/ /は音韻論的、[ ]は音声学的な記述を意味する。音声記号とかなの使い方は助川 (1993) を援用した。

この調査票を用いて、「0…見られない、1…まれに見られる、2…半数前後の学習者にお

いて見られる、3…すべて、あるいはほとんどの学習者においてその傾向が見られる」の4段階で回答してもらった。さらに、実例が記述できるものについては記入を求めた。

次に、発音指導の現状に関する質問では「①普段どんな発音指導をしているか」、「②発音指導をするにあたっての問題点は何か」以上2点について自由記述を求めた。

### 3. 結果

#### 3.1 ロシア語母語話者の日本語の発音の特徴

「ロシア語母語話者の発音特徴調査票」の83項目のうち、半数以上の教師が「0…見られない」以外の「傾向が見られる」を回答した16項目を表1に示す。表の項目は「傾向が見られる」とした教師数が多い順に並べた。加えて、先行研究で指摘されていた項目で16項目に挙げられなかった3項目についても表1下部に示した。なお、資料1には「ロシア語母語話者の発音特徴調査票」にある83項目それぞれについて「0…見られない」以外を回答した回答者数を示し、回答者が記入した実例がある場合はその実例を示した。

以下、表1に挙げられた項目、単音、拍、アクセント・イントネーションについて、単音から順に述べる。

単音は、16項目中7項目と回答が最も多かった。そのうち、4項目が子音に関する項目「27. ラ行はじき音→ふるえ音の [r]」「24. す→ズ」「8. /w/→[v]」「19. [h]→[x]」、3項目が母音に関する項目「32. お→ア」「30. アクセントをおかない母音をあいまいに発音する<sup>(2)</sup>」「34. う→円唇化の著しい [u]」であった。中でも「27. ラ行はじき音→ふるえ音の [r]」は、調査票に回答した教師全員が「傾向が見られる」と回答しており、評定平均値も2.23と高い値を示している。

拍に関しては16項目中8項目の回答があり、「チョコレート」→「チヨコレート」のような「29. 拗音→直音」の例を除くと、長音、撥音、促音などの特殊拍について「傾向が見られる」とする回答が多かった。2項目が長音に関する項目「48. 長音の長さが不十分」「47. 長音が誤って挿入される」、1項目が促音に関する項目「45. 促音の長さが不十分」、3項目が撥音に関する項目「55. 撥音と母音が連続するとその母音の前に [n] が起こる」「57. 撥音の長さが不十分」「56. 撥音と母音が連続すると撥音が [n] となる」であった。さらに、「58. 拍の長さが不均等」について実例(資料1)をみると「がっこう」→「がこう」のような促音が問題になる例も挙がっており、この項目にも特殊拍の問題が含まれていると言える。

アクセント・イントネーションに関しては「69. 助詞を著しく強く発音する」が挙がっていた。16項目中アクセント・イントネーションに関するものは「30. アクセントをおかない母音をあいまいに発音する<sup>(2)</sup>」も含め2項目と少なく、残りは単音や拍に関する特徴であった。

先行研究(戸田2006a、船津2005)で指摘されていた項目は、16項目の中に4項目挙がって

いた。挙がっていたのは、戸田（2006a）で指摘されていた、ラ行に関する項目「27. ラ行はじき音→ふるえ音の [r]」や、長音に関する項目「48. 長音の長さが不十分」「47. 長音が誤って挿入される」、船津（2005）で指摘されていた「34. う→円唇化の著しい [u]」であった。その他、船津（2005）が指摘していた「38. 母音が無声化する位置で、無声化が起きない」は6人の教師が見られると回答していたが、「75. 第一音節を著しく高くする」は1名が見られるとしたのみであった。さらに、鮎澤（1991）船津（2005）が指摘していた疑問文の「文末でピッチが下降」する特徴「65. 疑問文を下降調で発音する」は、3名が指摘するにとどまっていた。

表1. ロシア語母語話者の日本語の発音の特徴  
半数以上の教師が傾向が見られると回答した項目<sup>(1)</sup>

項目 番号	発音の特徴項目 <sup>(3)</sup>	0以外 回答者 <sup>(2)</sup>	平均・標準偏差 N=13		0以外回答者 <sup>(2)</sup> の平均・標準偏差	
		人数	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
27	ラ行はじき音 → ふるえ音の [r]	13	2.23	0.73	2.23	0.73
24	す → ズ	11	2.00	1.15	2.36	0.81
48	長音の長さが不十分	11	1.85	1.14	2.18	0.87
47	長音が誤って挿入される	11	1.77	1.09	2.09	0.83
45	促音の長さが不十分	11	1.54	0.97	1.82	0.75
32	お → ア	10	1.15	0.90	1.50	0.71
30	アクセントをおかない母音を あいまいに発音する	9	1.46	1.20	2.11	0.78
58	拍の長さが不均等	8	1.46	1.27	2.38	0.52
55	撥音と母音が連続すると その母音の前に [n] が起こる	8	1.31	1.25	2.13	0.83
34	う → 円唇化の著しい [u]	8	1.23	1.24	2.00	0.93
57	撥音の長さが不十分	8	1.08	1.04	1.75	0.71
8	／w／ → [v]	8	0.92	0.86	1.50	0.53
56	撥音と母音が連続すると 撥音が [n] となる	7	1.31	1.32	2.43	0.53
69	助詞を著しく強く発音する	7	1.08	1.12	2.00	0.58
19	[h] → [x]	7	1.00	1.08	1.86	0.69
29	拗音 → 直音	7	0.85	0.90	1.57	0.53
38 <sup>(3)</sup>	母音が通常無声化する位置で 無声化が起きない	6	0.85	1.10	1.83	0.90
65	疑問文を下降調で発音する	3	0.23	0.42	1.00	0.00
75	第1音節を著しく高くする	1	0.23	0.80	3.00	0.00

(1) 「ロシア語母語話者の発音特徴調査票」の83項目のうち、半数以上（7名以上）の教師が「傾向が見られる」と回答した16項目。

(2) 「0以外回答者」とは、各項目に「1…まれに見られる」「2…半数前後の学習者において見られる」「3…すべて、あるいはほとんどの学習者においてその傾向が見られる」のいずれかを回答した教師を指す。

(3) 項目38、75は船津（2005）で、項目65は鮎澤（1991）船津（2005）で指摘されていた項目である。

### 3.2 発音指導の現状と指導における問題点

#### 3.2.1 発音指導の現状

調査対象教師13名中記入のあった12名の回答内容を表2と表3に示す。表2には「①普段どんな発音指導をしているか」に対する回答を、発音指導をしている教師とあまりしていないまたはしていない教師に分けてまとめた。発音指導をしている教師は8名で指導項目、練習方法、共に様々であった。指導項目としては単音、拍、アクセント、イントネーションが、練習方法としてはシャドーイング、リピート、詩の暗唱が挙がっていた。

表2. 発音指導内容

指導	している	あまりしていない・していない
人数	8名	4名
内容	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 発音練習、単語単位でのアクセントの練習、文単位でのイントネーションの練習。</li> <li>2. 授業開始後10分ほどシャドーイングをしている。アクセントやイントネーションなど気になる場所はその都度示し、リピートさせている。</li> <li>3. 授業の最初に発音練習。 『1日10分の発音練習』使用</li> <li>4. 文字導入時に拍感覚の習得や、ロシア語にない音などの指導。</li> <li>5. シャドーイングや詩の暗唱とその指導。</li> <li>6. 名詞のアクセントを重点的に指導。 『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』使用</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. あまりしていない。明らかに直したほうがいいときには、教師が正しい発音をリピートさせる。</li> <li>2. 授業では特別に発音指導を取り入れていないが誤りが見られたときに適宜指導している。</li> <li>3. 発音指導をする余裕がない。</li> </ol>

#### 3.2.2 発音指導における問題点

表3には「②発音指導をするにあたっての問題点は何か」に対する回答を、発音指導をしている教師とそうでない教師別に、教師自身、指導項目・学生の意識、時間、の3項目に分類してまとめた。

表3. 発音指導における問題点 (教師自身、指導項目・学生の意識、時間)

指導	している	あまりしていない・していない
教師自身	<ol style="list-style-type: none"> <li>ロシア語母語話者に共通する発音上の問題が分からない。</li> <li>ロシア語の音声体系に関する知識がないので指導のポイントがつかめず、効率が悪い。</li> <li>専門的知識を持つ教師が少ない。</li> <li>学生の発音を聞いて、客観的にどこをどうすればいいのか説明ができない。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>ロシア語をよく知らないため、母語干渉による間違いやすい発音についてまだよくわかっていない。</li> <li>発音指導のスキルを持っていないので、適切な指導ができない。</li> <li>具体的に何から指導をすればいいのかわからない。</li> </ol>
指導項目 ・ 学生の意識	<p>■アクセント</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>学生が高低アクセントを理解できない。</li> <li>学生は「高い」「低い」音が「高く低く聞こえない」と言う。</li> <li>強弱アクセントの癖がなかなか消えない。</li> </ol> <p>■イントネーション</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>多くの学生が、教師と学生のイントネーションが違っていることが「全然わからない」と言う。</li> </ol> <p>■長音</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>長音は教師が何度言っても正しい発音が言えない。</li> </ol> <p>■学生の意識</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>クラスでの練習の場合、クラスメートの前で指摘を嫌がる可能性がある学習者がいるため、一人ひとりに十分に指導できない。</li> </ol>	<p>■アクセント</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>ロシア語は強弱アクセントなので、高低アクセントを頭で理解してもなかなかうまく発音できない。</li> </ol> <p>■単語</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>ロシア語圏で認知されている単語、すし、生け花、おりがみなどを、ロシア語式に発音する学習者がいて、それを直すのが大変。</li> </ol> <p>■学生の意識</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>あまり細かく発話を止めて指摘すると、話しながらない学生がでる恐れがある。</li> <li>地道な反復練習を学生がどこまで理解して継続できるかが課題。</li> <li>学習者に発音指導の重要性を認識させるにはどうすればいいかわからない。</li> </ol>
時間	<ol style="list-style-type: none"> <li>一人ひとりが十分な練習をする時間がない。</li> <li>発音指導に時間をかけられない。</li> <li>文法事項の復習に時間をとられてなかなか発音を指導する時間が持てない。</li> <li>学生が興味を持っているか持っていないかで発音指導に使える時間が変わってくる。</li> </ol>	

まず、教師自身に関する問題点としては「ロシア語母語話者の発音上の問題点が分からない」などのロシア語母語話者の発音の特徴についての認識不足や、「何から指導すればいいのかよくわからない」「学生の発音を聞いて、客観的にどこをどうすればいいのか説明ができない」などの指導面に関するものが挙げられていた。これら発音の特徴についての認識不足と指導面に関しての問題点は、発音指導をしている教師とそうでない教師の双方が挙げていた。

次に、指導項目の問題点としては高低アクセントの習得やイントネーション、長音、単語に関するものが挙げられていた。指導項目の中でもアクセントの習得をめぐる指摘は複数あり、発音指導をしている教師とそうでない教師の双方が挙げていた。その他、発音指導をあまりしていない教師から「細かく発話を止めて指摘すると、話したがる学生がでる恐れがある」など学生の意識面に関する問題点も挙げられていた。

最後に、時間に関する問題点として「発音指導に時間をかけられない」などの時間不足についての指摘があった。

このように、教師は発音を指導するにあたって、発音の特徴に関する認識の不足や、指導面、学生の意識、時間不足など多くの点について問題を抱えていることが明らかになった。

## 4. まとめと考察

本調査では、第一にロシア語母語話者のより網羅的な発音の特徴、第二にロシア語圏の発音指導の現状と指導における問題点を明らかにした。

### 4.1 ロシア語母語話者の日本語の発音の特徴

第一点目のロシア語母語話者の発音の特徴について、今回の結果から明らかになったことを以下順に述べる。まず、今回の調査結果の中で主にラ行や長音などのこれまでに明らかにされていた特徴について本調査においてもその存在が確認された（鮎澤1991、助川1993、船津2005、戸田2006a）。次に、助川（1993）、戸田（2006b）によって母語を問わず多くの学習者に見られると指摘されてきた特殊拍の特徴については、本調査においても多くの教師に指摘されていることから、この特徴はロシア語母語話者にも共通するということが示された。さらに、特殊拍以外にも松崎・河野（2005b）で指摘されている「24. す→ズ」「29. 拗音→直音」、これまで指摘されてこなかった「32. お→ア」「69. 助詞を著しく強く発音する」が特に目立つ特徴として挙げられた。

アクセント・イントネーションの特徴が単音や拍の特徴に比べ指摘が少なかったことについて以下に述べる。半数以上の教師が特徴が見られると回答したアクセント・イントネーションに関する項目は2項目と少なかった。これに関して、松崎（2004）が韻律面の逸脱が単音の誤りに比べあまり言及されない理由として、評価者が韻律について何か変だと感じていても誤り

の原因の特定が難しく、説明しにくい可能性を指摘している。本調査では細分化された詳細な韻律項目を用いており、回答者がその項目を特定するのが難しかった可能性が考えられる。このように特定が難しいと予想される韻律特徴を、教師はどの程度まで把握する必要があるのか、またそれをどう教育に生かしていくのか、評価研究や実践研究を通じた検討が必要であろう。

#### 4.2 現状と課題

第二点目のロシア語圏の発音指導の現状と指導における問題点について述べる。日本人日本語教師に対する質問紙調査により、発音指導は、指導の有無、指導項目、指導方法いずれにおいても教師の裁量に任されていることがうかがわれた。さらに、教師は発音指導をするにあたって、①発音の特徴についての認識不足、②指導面、③学生の意識面、④時間不足などに問題を感じていることが明らかになった。以下、ロシア語圏の音声教育の現状と課題について、本調査で明らかになった発音の特徴をふまえ、日本人日本語教師が感じる指導における問題点に沿って述べる。

まず、①発音の特徴についての認識不足の問題は、本調査の結果がその解決に寄与すると思われる。特に、半数以上の教師が傾向が見られるとした16項目は、ロシア語母語話者の発音の中でも目立った特徴であると言え、発音指導の際には教師がこれらを認識した上で指導にあたるのが効率的である。

次に、②指導面の問題解決に向けては、本調査で明らかになった特徴に対応した提示法、指導法の検討が必要であると考えられる。以下に、本調査で特に目立つものとして挙げられた特徴について、特筆すべき指導法と課題を述べる。

第一に、指導法については単音の「24. す→ズ」「32. お→ア」に対するものが挙げられる。これら「24. す→ズ」「32. お→ア」の改善には、言語学的な知見が参考にできると考える。「す」[s]と「ず」[z]、「お」[o]と「あ」[a]は、ロシア語にもその子音が認められ、特定の環境においてのみ間違えて発音されるため、ロシア語の規則による干渉が考えられる。具体的には、「24. す→ズ」は「ですが→でずが」「ますが→まずが」(資料1)となって表れるが、これはロシア語の無声音は有声音の前にあるとき通常有声化する(プレトネル1926)という規則が干渉している可能性がある。また、「32. お→ア」は、キリル文字「O」[o]はアクセントのない音節においては[a]または[ɔ]と発音する(プレトネル1926)という規則が干渉している可能性がある。このような誤りに対する指導としては、学習者にこれらのロシア語の規則による干渉を説明し、意識化させることが問題の解決に結びつきやすいと考えられる<sup>3)</sup>。

第二に、課題として「69. 助詞を著しく強く発音する」のような韻律特徴に対する指導法の整備が挙げられる。なぜなら、日本人は日本語音声の評価する際に単音より韻律を、韻律の中では特に音の「高さ」を重視する(佐藤1995、石崎2000)と言われており、「高さ」を基準と

するアクセントは評価に大きく影響することが予想されるからである。ロシア語のアクセントは強さアクセントを基本としており<sup>(4)</sup>、ロシア語母語話者にとって日本語の高低アクセントを習得するのは難しく、発音に「強さ」要素が表れやすい。これは、韻律項目で「69.助詞を著しく強く発音する」について指摘が多かった「72.音節内部でのピッチの変動が激しい」「74.第1音節を著しく強くする」(資料1)に「強さ」要素が表れていることからとも言えることである。このアクセントの指導については、本調査で複数の教師が問題点として挙げているように容易ではない。そのため、評価に大きく影響すると予想されるアクセントの指導法の整備は、ロシア語母語話者に対する音声教育において重要な課題であると言える。

最後に、③学生の意識面、④時間不足については、先に述べた各特徴に対する指導法が検討され、教師が指導項目のポイントを絞り効率的な授業ができるようになることが問題解決の鍵となるであろう。それに加え松崎・河野(2005a)のような「何を教えないか」を明らかにするための日本人評価研究や、発音指導を会話や聴解など音声以外の授業に取り入れる方法の検討も有効であると考ええる。

以上のように、ロシア語圏の音声教育の現状と指導における問題点を整理してきたが、取り組むべき課題は多い。今後は、得られた知見をふまえ、「なにを」「いつ」「どの順序で」「どの程度」「どのように」教えるのが効果的であるかを検証し、カリキュラム整備を進めることも必要である。そのためには、本調査で得られた成果を教室で生かし、データを蓄積して検証しつつ改善点を精査していく姿勢が重要となるであろう。

#### 〔謝辞〕

本稿の執筆にあたって、ご助言をいただきました筑波大学大学院の松崎寛先生、本調査にご協力いただきました日本語教師の皆様へ心より感謝いたします。

#### 〔注〕

<sup>(1)</sup>1991年にソビエト連邦から独立した国家で、人口は約986万人である。ベラルーシの公用語はロシア語とベラルーシ語であるが、国民生活では広くロシア語が使用されている(山本2005)。主要な日本語教育機関はベラルーシ国立大学とミンスク国立言語大学の2機関である。

<sup>(2)</sup>「30.アクセントをおかない母音をあいまいに発音する」は、アクセントの影響で単音に特徴が表れている点を捉え、「単音」と「アクセント・イントネーション」の両方に含めた。

<sup>(3)</sup>筆者のクラスで「24.す→ズ」の誤りについて、ロシア語の規則による干渉を意識化させたところほとんどの学生がすぐに改善できた。また、誤って「ですが」「まずは」と発音した場合でも発音後に自分自身で気づき、すぐに訂正できるようになった。

<sup>(4)</sup>ロシア語のアクセントは、基本的に「強さ」によってつくられ、「長さ」がそれをおぎなうかたちで存在し、「音調」「母音の質」がそれらに関与している(城田1979)。

〔参考文献〕

- 鮎澤孝子 (1991) 「イントネーションと日本語教育」『日本語学』第10巻、第7号、98-113、明治書院  
—— (2005) 「学習者の音声 母語別問題点」『新版日本語教育事典』35-36、大修館書店
- 石崎晶子 (2000) 「学習者の言語行動に対する母語話者の評価」『第二言語としての日本語の習得研究』第3号、19-35、第二言語習得研究会
- 今村和宏 (1994) 「極東ロシアウラジオストク日本語教育事情」『月刊日本語』8月号、24-31、アルク
- 木谷直之 (1998) 「極東ロシアの大学生の言語学習観について—海外日本語研修のための基礎データ作成を考える—」『日本語国際センター紀要』第8号、95-110、国際交流基金日本語国際センター
- 佐藤友則 (1995) 「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」『世界の日本語教育』第5号、139-154、国際交流基金
- 城田俊 (1979) 『ロシア語の音声—音声学と音韻論—』風間書房
- 助川泰彦 (1993) 「母語別に見た発音の傾向—アンケート調査の結果から—」『日本語音声と日本語教育』187-222、文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」D1班平成4年度研究成果報告書
- 戸田貴子 (2006a) 「音声教育へのニューズ—アンケート調査から分かること—」『第二言語における発音習得プロセスの実証的研究』89-137、平成16年度~17年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書
- (2006b) 「音声教育研究の歴史と展望」『第二言語における発音習得プロセスの実証的研究』139-154、平成16年度~17年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書
- 仲矢信介・稲垣滋子 (2005) 「ロシア・NIS 諸国への日本語教育支援再考」『日本語教育』127号、51-60、日本語教育学会
- 船津誠也 (2005) 「学習者の音声 ロシア語」『新版日本語教育事典』42-43、大修館書店
- プレトネル、オレスト (1926) 『實用英佛獨露語の発音』同文館
- 松崎寛 (1999) 「韓国語母語話者の日本語音声—音声教育研究の観点から—」『音声研究』第3巻、第3号、26-35、日本音声学会
- (2004) 「発音評価研究の展望」『日本人は何に注目して外国人の日本語運用を評価するか』37-51、平成12年度~平成15年度科学研究費補助金研究成果報告書基盤研究(B)(2)研究成果報告書
- 松崎寛・河野俊之 (2005a) 「アクセントの体系的教育を目的とした音声評価研究」『日本語教育』125号、57-66、日本語教育学会
- (2005b) 『NAFL 日本語教師養成プログラム8 日本語の音声II』アルク
- 山本靖子 (2005) 「ベラルーシの言語事情—標準語の問題を中心に—」『スラヴィアーナ』20号、223-229、東京外国語大学スラブ系言語・文化研究会

〔参考ホームページ〕

国際交流基金「海外日本語教育機関調査」

<<http://www.jpff.go.jp/japanese/survey/result/index.html>>2010年9月17日参照

ロシア語母語話者の発音の特徴と指導における問題点

資料1. 「ロシア語母語話者の発音特徴調査票」の項目一覧<sup>(1)</sup>  
 回答者の記入した実例<sup>(2)</sup>及び傾向が見られると回答した回答者数<sup>(3)</sup>

項目番号	発音特徴項目 <sup>(4)</sup>	実 例	0以外回答者数
1	/p/ → /b/		0
2	/p/ → [f]		0
3	/b/ → /m/		0
4	/b/ → /p/		0
5	ファ行の子音 → /p/		0
6	ファ行の子音 → [f]	「フォード」等の外来語を発音する際に目立つ	3
7	/m/ → /b/		0
8	/w/ → [v]	わたしは→ヴあたしは、わかりました→ヴわかりました	8
9	/d/ → ラ行はじき音		2
10	/d/ → /n/		0
11	/d/ → /t/		0
12	/d/ → [l]		0
13	/t/ → 歯茎でなく歯で調音する	たいせつな	4
14	/t/ → /d/	じたい(事態) → じだいい	1
15	/n/ → /d/		0
16	/k/ → /g/		0
17	/g/ → /k/		0
18	/g/ → 軟口蓋有声摩擦音		1
19	[h] → [x]	はっぴやく、はさみ、へや、なは(那覇)	7
20	[h] → 脱落		1
21	[h] → 摩擦が弱すぎる		0
22	し → [si]	わたし→わたすい、さしみ、すし	6
23	し → [zi]		2
24	す → ズ	ですが→でずが、ますが→まづが	11
25	ラ行はじき音 → /n/		0
26	ラ行はじき音 → /d/		1
27	ラ行はじき音 → ふるえ音の [r]	ろっぴやく、ろっぼん、はる、むんらく、よろしく、ロシア	13
28	ラ行はじき音 → [l]		5
29	拗音 → 直音	チョコレート→チヨコレート、きょうと→きよと	7
30	アクセントをおかない母音をあいまいに発音する	ともだち→たもだち、わたしのなまえ→わたしNなまえ	9
31*	あ → オ		2
32*	お → ア	おはし→あはし、えいごを話します→えいが話します	10
33*	う → ы	こうい(行為)、ほうい(方位)	1
34	う → 円唇化の著しい [u]	くつ、いっしゅうかん、かぐや姫、たぶん にく、	8
35*	エ段の子音の後ろに イェ が入る	からて(空手) → からチィェ、かぶ、ゆめ、	4
36	オ段で円唇化が強すぎる	こうこう、もし、おおさか、ところ、ダンスをおどる	4
37	鼻音の前で口母音が鼻母音化する	こども	1
38	母音が通常無声化する位置で無声化が起きない	です、ます	6
39	母音の間に声門閉鎖が起こる		1
40	語頭の母音の前に声門閉鎖が起こる		1
41	末尾の母音の脱落		1
42	促音 → すべて歯茎閉鎖音で発音する	きっさてん	3

43	促音 → すべて声門閉鎖音になる		1
44	促音が誤って挿入されたかのように聞こえる	みっなさん	5
45	促音の長さが不十分	がっこう→がこう、じゅっぶん→じゅぶん	11
46	長音 → 撥音		1
47	長音が誤って挿入される	ロシア→ローシア、いっしょ→いっしょう	11
48	長音の長さが不十分	どうぞ→どぞ、ゆうめい→ゆめい、びょういん→びょいん	11
49	撥音 → すべてが [n]	しんぶん	3
50	撥音 → すべてが [ŋ]	しんぶん	2
51	撥音 → すべてが通鼻母音	しんぶん→しぬぶぬ	2
52	撥音が誤って挿入される (語末で)		0
53	撥音が誤って挿入される (鼻音の前で)	パニック→ばんにく	1
54	撥音と母音が連続するとその母音が鼻音化する	げんいん (原因)、けんあん (懸案)	2
55	撥音と母音が連続するとその母音の前に [n] が起こる	せんえん→せんねん、きんえん→きんねん	8
56	撥音と母音が連続すると撥音が [n] となる	ワイン売り場→わいぬりば、きんえん→きねん	7
57	撥音の長さが不十分	こんにちは→こにちは	8
58	拍の長さが不均等	パロバイヤ (4拍) →パロバイヤ (3拍)、がっこう→がこう	8
59	第1音節を著しく長く発音する		1
60	第2尾音節 (最後から2番目の音節) を著しく長くする	ロシア語のイントネーションで読む	2
61	尾音節 (最後の音節) を著しく長くする		2
62	文末の音節を著しく長くする		1
63	疑問文をすべて極端な上昇調で発音する	そうですか? わかりますか? テニスをしますか?	5
64	下降上昇調が上昇調になる		4
65	疑問文を下降調で発音する	いいですか、「か」を上げてほしいのに下がってしまう	3
66	文節末ごとに著しく強く発音する	助詞、て形、たり、など	4
67	文節末ごとに著しく高く発音する	助詞、て形、たり、など	5
68	文末の助詞だけを著しく高く発音する		4
69*	助詞を著しく強く発音する	私は友達とデパートへ行きます	7
70	ビッチの幅が小さすぎる		2
71	ビッチの幅が大きすぎる	アクセントの高低の差が大きい	5
72	音節内部でのビッチの変動が著しい		6
73	音節ごとの強弱の差が著しい	高く発音すべきところが強く発音されてしまう	5
74	第1音節を著しく強くする	この、その、あの	6
75	第1音節を著しく高くする		1
76*	第2音節を著しく強く発音する	きれい	5
77*	第3音節を著しく強く発音する		2
78	第2尾音節を著しく強くする		3
79	第2尾音節を著しく高くする		1
80	尾音節を著しく強く発音する	て形の「て」「で」	4
81	尾音節を高くする		3
82	語のアクセントがどれも平板式のようになる		3
83*	文末の述語を早口で言う	～しました、～なければなりません、～させていただけませんか	4

(1) 項目の \* 印は本研究で追加した項目である。

(2) 記入例が多数挙がっていたものは、一部のみ記載した。

(3) 各項目に「1…まれに見られる」「2…半数前後の学習者において見られる」「3…すべて、あるいはほとんどの学習者においてその傾向が見られる」のいずれかを回答した回答者数。

(4) [27. ラ行はじき音→ふるえ音の [r]は、日本語のラ行はじき音をふるえ音の[r]で発音する特徴があるという意味である。// は音韻論的、[ ] は音声学的な記述を意味する。音声記号とかなの使い方は助川 (1993) を援用している。